

## 16世紀の活況の中で！

16世紀、銀のグローバルな流通の中で国際貿易が発展し、ヨーロッパから鉄砲が伝来すると、東アジア各地に、軍事と商業が結びついた強力な新興勢力の台頭を見た。

- 1) 日本への鉄砲伝来は、1543年9月23日、大隅国（鹿児島県）の【1: 】西之浦湾に漂着した中国船に乗っていた2人のポルトガル人が鉄砲を所持しており、これを購入したこと。この現場で明の儒学者（？）が筆談で通訳を行っており、この中国人は後期倭寇のリーダー、王直である可能性が高い。鉄砲と言っても火縄銃であり、当時の鍛冶技術で複製可能だった。この時伝来した鉄砲もポルトガル製ではなく東南アジアで複製されたものである可能性が高い。
- 2) 天下統一事業を推進していた尾張国の【2: 】おだのぶなが1534-82が大量に装備し、1575年（天正3年）に甲斐武田氏との長篠の戦いをはじめとする戦いで、鉄砲を有効活用したとされ、鉄砲が戦争における主力兵器として活用される軍事革命が起きたとされる。  
フィギュアスケートの織田信成（2014年引退）は織田信長から数えて17代目の末裔。
- 3) 【3: 】とよみひでよし1537-98は、軍事力を飛躍的に高め、火縄銃を大量に装備、貿易港や銀山を掌握した。1590年代に日本を統一した豊臣秀吉は、倭寇を禁止したが、2度にわたって【4: 】を行った。この時も、鉄砲は大きな威力を発揮したが、日本水軍の完敗や朝鮮農民の強い抵抗、明の援助などで後退、【3】の死で撤収。No.80で詳述。朝鮮王朝は明の朝貢国であり、この出兵は明を中心とする当時の国際秩序に真っ向から挑戦するもので、ここまでやったら明との正式な国交回復は不可能である。そうでなくても、倭寇の根拠地とみなされていた（後期倭寇については本当は違う！）ので、海禁の緩和後も中国商人の日本渡航は禁じられていた。
- 4) 中国の産物は利益が大きいので、【5: 】とくがわいえやす1542-1616は、東南アジアの諸港市やオランダ人が支配していた台湾、ポルトガル人の居留地マカオなどに船を派遣して中継ぎ貿易で中国の産物を入手した。この船を、江戸幕府の朱印状を持っているので【6: 】と言ひ、1635年まで行われた。【6】は明の許可をうけた貿易船だと誤解している諸君もいる。また、ポルトガル、オランダなどにも朱印状を発給して中国などの中継ぎ貿易をさせている。
- 5) 特に中国産生糸の輸入は利益が大きく、中国はもちろん、ポルトガル、オランダの商人も競って参加した。ポルトガルは1557年、【7: 】の居住権を認めさせ、オランダは1624年、明末の混乱に乗じて【8: 】を占領、1661年、鄭成功に撃退されるまで確保して、商業拠点とした。これらも、この時期のできごとである。
- 6) 江戸幕府は、その初期において、キリスト教禁止と貿易統制を目的として、欧米諸国との接触を禁止する【9: 】を、数段階に分けて実施。ついに、1635年には日本人の海外渡航と帰国を禁じ、1641年、オランダ商館を平戸から人工島の出島に移して活動を制限した。この時既に、タイ・フィリピン・ヴェトナム・カンボジア・ミャンマーなどに、人口数百から数千の規模で存在した日本町は、衰退、消滅した。アユタヤ朝に使えた山田長政も1630年に亡くなっている。

## 建国者＝後金はヌルハチ、清はホンタイジ

中国東北部には、ツングース系の女真（女直、後に「満州」マンジュに改称）が住んでおり、金（1115年～1234年）を建国したが、金の滅亡以降は、元・明に服属してきた。彼らは、16世紀末、【10: 】で勢力を盛り返した。

- 1) 貿易の活発化の影響は中国東北部にもおよび、薬用人参や毛皮の交易をめぐる女真の諸部族間の闘争に勝利した【11: 】1559-1626は、1616年、金（原語では「アイシン」）を建国した。完顔阿骨打が1115年に建国した金と区別するため、これを【12: 】こうきん1616-36と呼ぶ。
- 2) 第1代太祖ヌルハチは【13: 】はつきを編成した。すべての家臣・人民はいずれかの旗に所属して兵役、労役、納税などの義務を負った。  
八旗はつきとは、後金・清朝独自の軍事制度で、完成期には黄・白・紅・藍とそれぞれに縁をつけたものからなる計八色の旗で区別。男300人＝1ニル、5ニル（1500人）＝1ジャラン、5ジャラン（7500人）＝1グサ（旗）、八旗で6万人の大軍団である。このほかに治安維持にあたる漢人による緑營（緑旗）があった。ヌルハチは満州人の八旗（満州八旗）を創始し、第2代太宗ホンタイジは蒙古八旗、漢軍八旗を加えた。
- 3) 1619年、建国間もない後金の存亡をかけたサルフの戦いで、ヌルハチは強力な八旗で明軍を殲滅し、遼東地方を奪取して中国東北部支配を完成した。1621年に奪った瀋陽しんよう/シエンヤンを1625年、首都とした。ヌルハチは、女真文字にかえて、【14: 】を作った。基本はモンゴル文字。
- 4) 第2代太宗ホンタイジ位1626-43は、1635年に、内モンゴルを支配する大元ハン直系の【15: 】を平定し※1、モンゴル大ハンの地位を引き継いでいた。満州人であるホンタイジがモンゴル大ハンの地位を継承した。同1635年、太宗ホンタイジは民族名を【16: 】（マンジュ）※2と改名した。その翌年、1636年、ホンタイジは、首都瀋陽で中国皇帝を称し、国号を【17: 】と改めた。1637年、朝鮮王朝（李氏朝鮮）を服属させた。彼らは第1代太祖はヌルハチであると考えているので、ホンタイジは清の建国者なのに2代目なのだ！ただし、まだ中国東北部しか支配していない。名実ともに中華帝国皇帝を継承したのは第3代世祖順治帝である（後述）。

※1 内モンゴル平定後の間接統治を目的に蒙古衙門もうこがもんが設置され、太宗在位中の1638年に理藩院と改称された（1906年には理藩部と改称された）。

※2 文殊菩薩もんじゅぼさつに由来する。民族名であると同時に後に居住地の中国東北部を指す地名ともなった。今日、中華人民共和国や中華民国の政府は「満洲」という呼称を避け、同地域を「東北」と呼称している。日本では通常、「中国東北部」とし、注釈として旧満洲という表現を（ ）付きで使用することがある。理由はお分かりと思う。



## 「明は万曆に滅ぶ」

- この言葉は清の史書に記述された評価。実際に滅んだのは崇禎帝（第17代 すうていてい 毅宋きそう 位1627-44）の時である。
- 1) 17世紀前半には、明は莫大な軍事費のため、深刻な財政難におちいった。この時、10歳で即位したのは**万曆帝**（第14代 ばんれきてい 位1572-1620）。聡明にして大器と目されていた。宰相（主席内閣大学士）【18: 張居正】1525-82の手腕により、財政は好転、**アルタン=ハンとも和議**を結び、内外政ともに大きな成果をあげた。張居正の主な仕事は、両税法にかわる【19: 一条実】の導入、無駄な官職の撤廃・全国的な検地の実施・無用な公共事業の廃止等による**財政の再建**等。この頃、スペイン・ポルトガル・日本から大量の銀が流入。貨幣経済が発達していた。張居正の他にスーパー官僚として有名なのは道光帝に仕え、密輸アヘンを摘発した林則徐（1785-1850）があげられる。
  - 2) 1582年に張居正の死で、親政を始めた万曆帝は、寵姫鄭貴妃を偏愛して立太子問題を起こし、豊臣吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）において、宗主国として李氏朝鮮を援助した他、①寧夏・貴州反乱、②播州はしゅうの乱（1597）を鎮圧、③朝鮮に出兵した豊臣秀吉軍とも戦い（①②③を万曆の三大征と呼ぶ）、後金とも戦い、軍事費で財政は悪化した。
  - 3) 政府内の紛争（党争）が激化した。それは顧憲成が復興した東林書院※3を中心とする【20: 魏忠賢】と、魏忠賢ら宦官勢力と結んだ**非東林派**の争いだった。東林派の活動拠点だった江南は政府批判の中心地だった。宦官が跋扈するようになり、重税と自然災害で農村は疲弊した。明の遠征軍は満州の女真ヌルハチに破られた。しかし、党争のため有効な対策はとられなかった。※3 張居正の死後、1582に失脚した顧憲成（1550-1612）は、復権して中枢に戻り、1594に辞職して江南の無錫（江蘇省）に東林書院を再興した。設立は1604年。
  - 4) 【21: 張居正】位1572-1620は新税を設け、宦官の徴税官（税監）に徴収させたが、皇帝は国家の財産を私物化、税監たちも横暴をきわめ、あまりの徴税の厳しさに耐えかねた民衆は税監をしばしば殺したが、万曆帝は最後まで廃止しようとはしなかった。17世紀初めから各地の人民はたびたび反乱を起こした。  
農民の小作料不払い闘争＝抗租 家内奴隷の解放めざす暴動＝奴変 めへん  
農民の徴税拒否闘争＝抗糧 賃労働者の徴税反対暴動＝民変 みんべん  
**鄧茂七の乱**（1448）は明末ではないが、福建で起きた典型的な抗租運動  
東林派の官僚や知識人も宦官の横暴に反対して立ち上がったが弾圧された。
  - 5) このような危機の中でも万曆帝は政治に無関心。25年にわたって後宮にこもり、朝政の場に全く姿を現さなかった。官僚の欠員を補充せず、その分の経費を私財化する等、国家財政を無視して個人の蓄財に走った。宦官が一人しかいないとか、地方長官が規定の半数しかいないなどということさえあった。鄭貴妃の子である福王朱常洵を溺愛、その結婚式のために30万両という金額を使った（張居正が宰相を勤めた十数年間に国庫に蓄積された金額、400万両と比較しよう）。民衆の恨みを買った福王は、李自成軍に捕らえられた時に残忍な殺され方をしている。  
清代に編纂された正史の一つ、『明史』に「明は万曆に滅ぶ」と記述される所以 ゆえん である。『明史』は完成まで約90年（中断期含む）を要し、中国正史の中でも公平で正確を期したものとの評価が高い。編纂途上の1717年、康熙帝（当時64歳）は「未だに記されていないことが多い。公式の記録がないため誤りが非常に多い。そのため、大臣は編纂を急がせようとしているがそれは無理である。急いで編纂する必要はない。」と指示している。完成は1735年、出版は1739年（乾隆帝）。
  - 6) 万曆帝の時代は明の退廃と爛熟の時期であった。この時期に外国産の銀が大量に流入し、経済界は活況に沸き、その影響で文化的に最盛期を迎え、景德鎮における万曆赤絵などの陶磁器の名品が生まれた。万曆帝は【22: 李時珍】の出版に便宜を与えるなど、中国本草学の発展への寄与は大きい。

## 明の滅亡

- 1) 17世紀初めから各地の都市で反乱がたびたび起きる。  
東林派の官僚や知識人も宦官の横暴に反対して立ち上がったが弾圧された。  
万曆帝の失政で更に危機は深まった。 前掲記事参照
- 2) 崇禎帝（すうていてい 最後の皇帝 位1627-44）のころ、飢饉、蜂起あいつぐ。  
全地球的な温度低下があったのではないかとされている。※4 1644年、【23: 李自成】に北京を占領され（李自成の乱）、崇禎帝は自決し、明朝は滅んだ。同年中に華北に入り【23】を打倒し、中国を征服したのは、清の第3代皇帝【24: 努ルハチ】じゅんちてい 位1643-61である（清の建国は1636年）。  
※4 1645年から1715年に太陽黒点は非常に少なくなり、ヨーロッパと北アメリカがひどく寒い冬に襲われ、ロンドンのテムズ川は完全に凍りつき異常な寒さになった。いわゆる「ミニ氷河期」（半世紀続いたという）について諸君は聞いたことがあるだろう。それはちょうどこの時期だった。なお、2012年ごろから再びこれに入ると警告する論文が書かれている。地球温暖化論は定説というわけではないのだ。

2006 上智大学 次の事項(イ～ル)は、それぞれ選択肢(a～f)のどの皇帝(の時)のことか。正解がない場合はg。

- |   |                                |    |               |
|---|--------------------------------|----|---------------|
| イ | 皇帝がオイラトのエセン=ハンによって、土木堡でとらえられた。 | a  | 永楽帝           |
| ロ | 南京から北京に首都を遷した。                 | b  | 万曆帝           |
| ハ | 里甲制を制定し、賦役黄冊を作成した。             | c  | 洪武帝           |
| ニ | 豊臣秀吉の軍に侵略された朝鮮王朝の要請で、援軍を派遣した。  | d  | 崇禎帝           |
| ホ | 諸王勢力の削減をはかった皇帝に対し、燕王が挙兵した。     | e  | 正統帝           |
| ヘ | 張居正が出て、中央集権的な財政の立て直しをはかった。     | f  | 建文帝           |
| ト | 宦官の鄭和に命じ、艦隊をひきいて遠征を行わせた。       | 注: | すべて明の皇帝である。   |
| チ | 李自成の反乱軍に北京を占領され、皇帝がみずから命を絶った。  |    |               |
| リ | 『四書大全』『五経大全』などの編纂事業が行われた。      | 正解 | イ e ロ a ハ c   |
| ヌ | 民衆教化のために、六カ条からなる教訓、六諭を定めた。     | ニ  | b ホ f ヘ b ト a |
| ル | 中書省を廃止して六部を皇帝の直属下においた。         | チ  | d リ a ヌ c ル c |